

現代「士君子」への期待

特別会員 浅野 種正



相川英一氏および宮崎康次氏それぞれによる前二回の本欄に触れられていたエジプト日本科学技術大学（略称EJUST）の創設・立ち上げという政府の技術協力事業に、大学の一教員として関わる機会をいただいた。15余年にわたる同プロジェクト期間において、去る3月までの5年間は、現地にも活動してきた。コロナ禍もあり限られた経験であったが、それを基にエジプト事情を紹介したい。

エジプトの人口は1億1千万人余りで世界15位、日本とほぼ同様であるが、年齢層別人口に示すように日本とは対照的に若年層人口が多く、潜在的な力を有している。他の多く

のアラブ諸国も同様で、中東・北アフリカ地域を将来の魅力ある市場としている理由の一つである。

人口の95%は同国の唯一の水源地であるナイル川流域かカイロ北部にナイルを水源に灌漑で拡大してきたデルタと呼ばれる緑地帯にのみ住むため、可住地人口密度は高い。そのため首都カイロは慢性的な渋滞や大気汚染が激しく、約35キロ東側に新行政首都を、またそれらをつなぐようにニューカイロと呼ばれる新都市を建設中である。また、地中海沿いにある同国第二の都市アレキサンドリアの西に位置するアラメイン市を新たな経済活動都市にする構想もあり、カイロからアレキサンドリア経由で片側5車線を主とする道路が整備されている。高速鉄道を整備するという噂もある。

政府債務の対GDP比が90%近いという状況ではあるものの、このような積極的な公共投資が牽引して経済成長率は5%を超え（2022年、

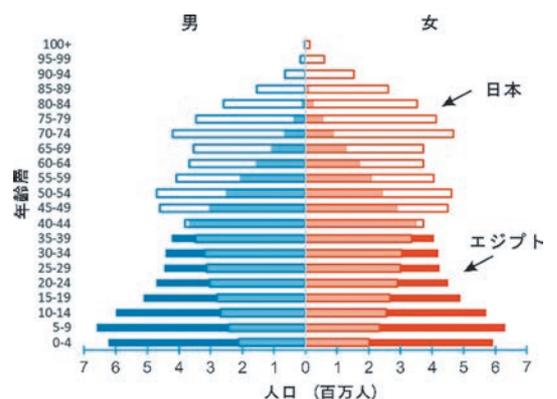
国際通貨基金）、街は活気にあふれている。

一方、外貨の獲得源としては、観光産業、スエズ運河の通行料、そして外国への出稼ぎ送金が主たるものである。観光では、ギザの大ピラミッドに象徴される古代遺跡群に加えて、地中海沿岸やCOP27が開催されたシャルムエルシエイクなど紅海沿岸がリゾート地として欧州などの人々に人気を博している。

エジプトには石油産業があるとの誤解をときどき耳にする。確かに石油を輸出しているが、その額は30億米ドル弱で、サウジアラビアの百分の一程度である。東地中海のガス田



エジプトの主要都市位置 (Google map に追記して作成)



日本とエジプトの年齢層別人口 (2022) (The World Fact Book のデータより筆者作成)

から採れる天然ガスも国内需要を賄うのに輸出をしばらく停止した状況であり、規模は大きくない。

つまり、エジプトは輸出して外貨を稼ぐ工業製品や農産物に乏しい。したがって製造や加工などの就労人口は少なく、貧富の格差が激しい。世界を驚かせたダイアナ妃のツーショット写真はお相手のエジプト人が所有するクルーズ船上のものであるほどの大富豪がいる一方、渋滞する道路で停車している車列に向かってティッシュや水などを売り回す子どもたちも多く見かける。従来型の外貨獲得源は堅調ではあるものの、増加する人口の国民を養うにはやは

り新たな産業を興す必要がある。先般、EJUSTのアドリ学長と面談した折、我々は毎年新たに100万人分の雇用をつくり出す役割の一端を担っていると言っていたのもうなずける。

前2号の本欄にも述べられていたElaraby社は、同国電機産業発展の牽引役として今後ますます存在感を高めるものと期待される。これまでノックダウン生産で培ってきた技術に加え、独自の部品設計や製造も担える人材が早期に育って欲しいと感じる。国立電子研究所の所長が技術展示用の太陽光パネルを見せながら、中国から技術指導者が来るが、日本からも来てもらいたいと言っていたのが印象に残る。

人材育成に対する同国の意識は高い。例えば、国立大学の学費は無料である。それと若年層人口の増加が相俟って、主要国立大学の学生数は増加し、例えばカイロ大学は現在20万人を超えている。その結果、教育の質の低下を招き始めたことを危惧し始めた。一方、2001年にいわゆる9・11テロが発生し、それによるイスラム圏の孤立を恐れた同国が、科学技術で国を支える方針を打ち出し、少人数教育で科学技術高度

人材を育成する機関の創設を目指したこともEJUSTプロジェクト発足の背景にあるようである(岡野著「科学技術大学をエジプトに」佐伯コミュニケーションズ、2022)。

そのEJUSTは大学院の開設から始まり、「アラブの春」の政治的混乱期を経て、現在は工学部と国際ビジネス・人文学部の2学部(学生数計約1900名)と大学院(同計約350名)より成る。アフリカ地域から100名近い留学生がおり、我が国から見てもアフリカのハブとしての存在感も増している。今後、アフリカ連携にさらに力を入れると聞いている。

EJUSTは特異な存在である。先ず、国立大学だが授業料を徴収する点である。二点目は、英語能力がIELTS評価6.5以上でないと入学できないことである。この基準は日本の大学の国際コース入学と同等である。これら2点の「ハードル」にも拘わらず、入学者のおよそ5倍の志願者がある。ちなみに、入学式に学生に同行している親から日本語で話しかけられることも少なくなく、日本シンパが多いと感じる。授業中にたくさん出る質問やPB L(学生が数人ずつチームを組み、



E-JUSTでの企業説明会の出展企業(2022)

役立つモノを提案し実際に作って見せる3年生の科目)での質疑から、理解度に優れる者、いわゆるオタクで独特の鋭い感覚を感じさせる者など個性豊かで多様性に富む。

兵役(Soldier)は1年、Officerは3年と聞いた)があることもあつてのことと思われるが就職活動は基本的に個人ベースである。一方、EJUSTは日本の大学のように就職支援サービスも提供している。その一環として企業説明会を毎年実施している。

日系企業の同国への進出数は51社(2021年現在、ジェットロ)、投資額は24億円(2022年、日本銀行)で伸び代が大きいと感じる。

筆者の専門である半導体に関する講義で学生から、エジプトでこの分野に関する仕事はありますか、と尋ねられた。2019年のことである。設計であればと現地の教員に調べてもらったところ、確かに業界で有名な企業を含む約5社が、いずれも100人未満の規模ではあるが、あることがわかり、胸をなで下ろした。それも東の間、2023年に改めて調べたところ、驚くことに21社に増えていた。しかも最大の独シーメンスの事業所は700人規模である。

2014年に初めてエジプトを訪れた際、中東経由で現地入りした。深夜便であったがビジネス用務らしい人たちが多くて満席で、「世界は動いている」と強く感じた。日本からも多くの人がこのダイナミズムに積極的に参加することを期待したい。それには、異なる文化・習慣への寛容さが必要と思われる。現役生の皆さんには現代の「士君子」の素養としてぜひ備えていただきたい。